ルカの福音書　第12章　6節

「5羽の雀はニアサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。」

雀はどこにでも見られる、ごくありふれた鳥類です。空の鳥を見なさいと話された山上の空にも多くの雀が飛び交っていたことでしょう。比較的みどりの濃いガリラヤ地方の一帯をも飛んでいたでしょう。湖畔の水辺でたわむれる群れも見られたでしょう。大型の鳥と異なり、人々が特に注目するような存在ではありません。その存在の軽さは今日も同じです。悲嘆で静まる時は別として、人々が一羽の雀を見て立ち止まることはありません。

雀の代価を当時の最小貨幣、アサリオンで量られていることからも存在の軽さがわかります。束ねてもさほどの価値を持たない生きものです。人の目では、貧しさの象徴として扱われる存在です。人の目からすれば、ありきたりのもので、そして見るからに貧相な存在です。

人々がそんな、と言ってしまうほどの雀さえ、神の目からは、忘れられてはいません。野原では束ねて見られ、町では目もくれる人がいなくて、湖畔ではカモメに餌をやる人たちはいても、雀にはそこでこぼれた屑が食物となります。しかし、そんな雀の一羽をも神は忘れません。